第6講　刊行絵図からみた洛中洛外

(1)　問題提起

　江戸時代を日本における「地図の時代」と呼ぶ人がいる。確かに日本の江戸時代は官・民ともに世界に例がないほど数多くの地図を作成し、刊行していた。その地図の中に「都市図」名づけられたカテゴリーがある。幕府や各藩が作成した都市図は手書きの城下町図や国絵図、領分絵図といった行政資料になる地図である。それに対して民間の板元から出版された絵図は江戸・京都・大坂を始め、長崎・横浜・新潟・奈良など、幕府直轄地の都市がほとんどで１）、商業目的で作成された地図である。

　現存する刊行都市図の中で最古のものといわれているものが京都大学附属図書館所蔵の不可解な京都図である２）。識語には「都記」（別称、「寛永平安古図」）とこの図のタイトルらしきものがある。「都記」とは文章のタイトルのようである。「都記」という記載がありながら、「寛永平安古図」という別称がついた理由は、「都記」が絵図のタイトルとは思えなかったためであろうか。しかし、この絵図の製作者たちは絵図とは思えないタイトルを敢えてつけたのはなぜだろうか。ここに一つ目の不可解さがある。さらに不可解なことは、江戸時代初期の京都を地図化したものではあるが、「都記」は京都市街全体を描いていないという点である。なぜ江戸時代初期の京都市街の一部だけを取り上げたのか、その理由は識語にも記載されていない。

　絵図（地図）は地表面上の事物・事象を絵記号や図形記号で表現したものである。対象になる事物・事象は客観的であっても、そのすべてが描かれるのではなく、描かれるべき対象は、製作者たちの意図・目的に基づいて、さらに拡大すれば同時代の京都の人々が共有していた意識・価値観に基づいて、選択されている。「都記」というタイトルにも製作者たちのメッセージが込められている。そうした意味で、絵図（地図）は極めて主観的な製作物である。そこで、「都記」とその後継図を分析対象にして、そのタイトルと記載内容の変化から、江戸時代前期の京都の人々の地域認識を考えていく。

1)　民間から出版された絵図（地図）には熱海や上州草津などの温泉地、鎌倉などの名所などがあるが、都市図とはみなされていない。

2)　現存する「都記」は寛永3年の図とされている。